

# 算命学中庸

## 【初年】 6 2 回目

6 2 回目の授業はこのページからです。

授業科目 【宿命と健康】

・【初年】 6 2 回目【宿命と健康】 01

### □ 宿命と健康 (しゅくめいとけんこう)

人間はどこからきて、どこへ向かうのでしょうか。

私たちが「此の世に生まれてきた」ということに、  
どのような理由があるのでしょうか……。

どのような目的があるのでしょうか……。

参考：理由〔物事がそのように至った事情。また、その根拠。〕

ここからの記述は、算命学で考えている内容です。  
部分的に異論<sup>いろん</sup>がある方もおられるでしょう。

☞ 算命学は、自分が生まれたのは「宇宙が必要としているから生まれてきた」と考えています。

世の中が自分を必要としているから、家族が必要としているから、自分の家系が必要としているから、親が必要としているから——これらの理由で子供が生まれて来ることはない。と考えています。

子供が生まれて来るには、両親の存在があるわけですから、その意味では親も入るわけです。  
そして、必要としなくなった人間は、此の世に存在できない。とも考えています。

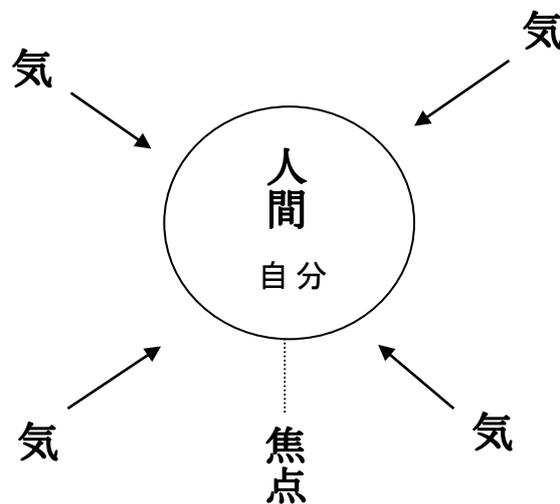
この説には納得できない部分があると思いますし、  
同調<sup>どうちょう</sup>できない方もおられるでしょう。<sup>かた</sup>

再度もうしあげます。算命学の考え方です。

宇宙空間における地球の存在は、太陽系宇宙のなかの惑星に「わくせい気の<sup>き</sup>焦点<sup>しょうてん</sup>」があり、それで地球が誕生したと考えているようです。

その「気の焦点」に人間の存在があるとしています。

宿命（1）気の焦点



参考：存在〔客観的事実としてそこにあること。〕

参考：焦点〔レンズを透して入ってきた光線が集まる点〕

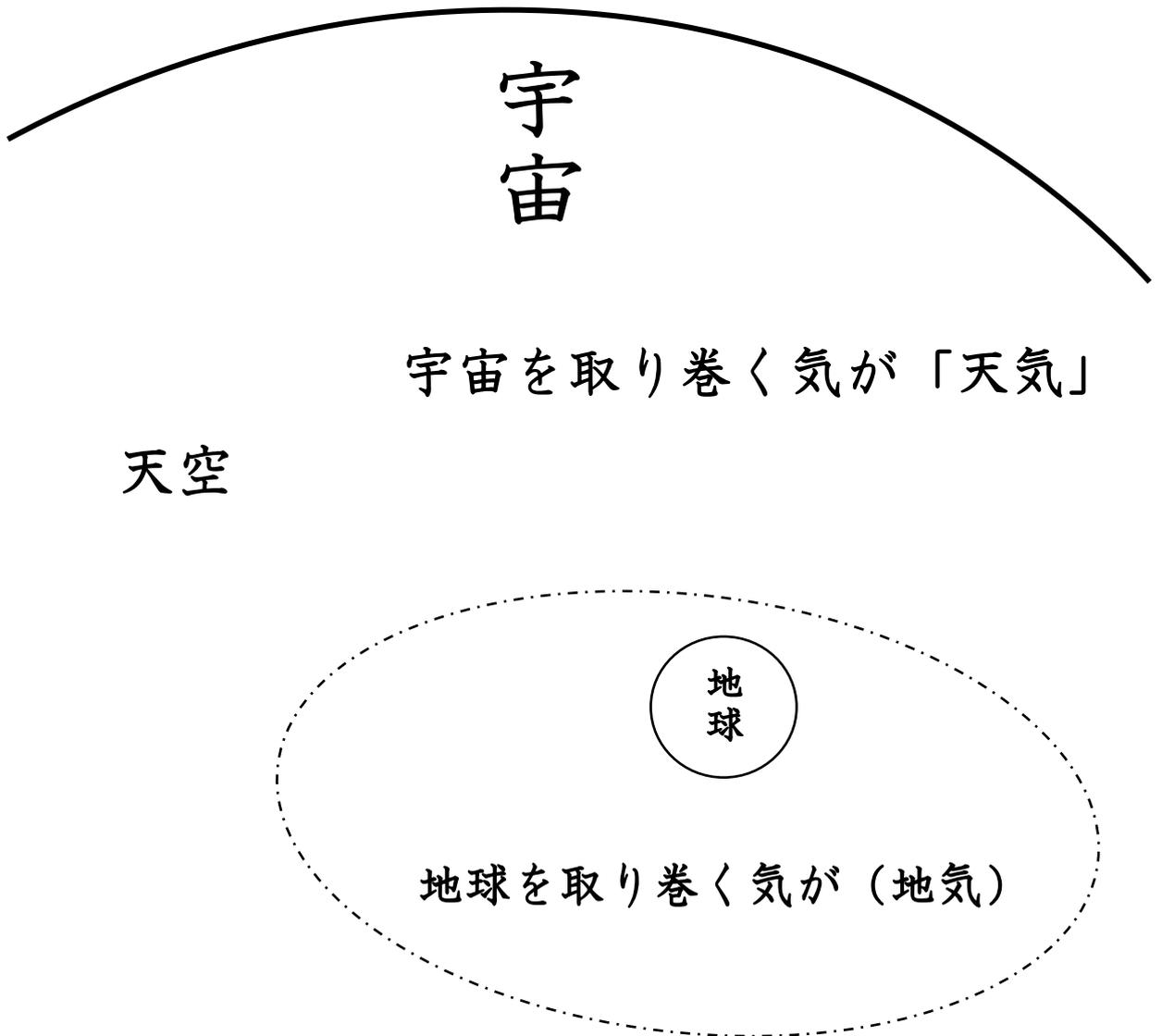
参考：分析〔複雑は事柄を一つ一つの要素や性質に分けること。〕

算命学では、いくつかの惑星があって、その惑星の遠心力のバランスのなかに焦点があり、そこに地球が必然的に現れたと考えているのです。

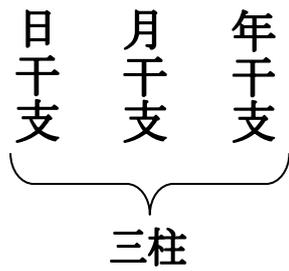
その「<sup>き</sup>気」を大別すると……地球があつて、地球を取り巻く<sup>てんくう</sup>天空（宇宙）があります。

宇宙を取り巻く気は「<sup>てんき</sup>天気」であり、地球を取り巻く気は（<sup>ちき</sup>地気）であるとしています。

宿命（2）天気・地気



天気<sup>ぶんせき</sup>を分析したものが十干<sup>じっかん</sup>です。地気を分析したものが十二支です。それゆえ「干支」に生年月日を当てはめますが、それは自分に与えられた天気と地気を知ることです。



さんちゆう  
三柱は自分に与えられた天気と地気  
を知ることです。

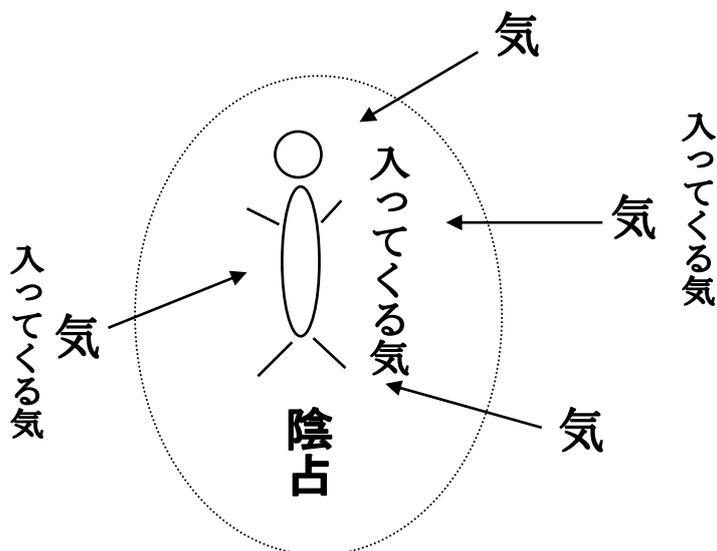
干支そのものの存在は「<sup>じんき</sup>人氣」ではありません。  
干支をただ並べてだけでは——人氣ではないのです。

地球上に人間が誕生すると同時に、<sup>てんき</sup>天気と<sup>ちき</sup>地気の両方の気が人間に入ってきて、<sup>じんき</sup>人氣という人間の<sup>しょうき</sup>気を生じます。  
それは生年月日で表されます。

人氣は「陰占宿命」として、この人物は、このような干支をもっている。ということになるわけです。

🔍 参照⇒【初年】 27 回目 【流入論・発揮論】

宿命 (3) 入ってくる気



その日<sup>ひ</sup>に生まれたその人の生年月日を干支で読むときそれが——<sup>じんき</sup>人気です。

〔たとえば〕2025年1月1日に生まれた人に、天気と地気が入って「人気」となり、その宿命を<sup>さんちゆう</sup>三柱で表します。

「年干支」「月干支」「日干支」を1人の人物とするとき、それが「<sup>き</sup>気<sup>しょうてん</sup>の焦点」になります。それゆえ人間を『小宇宙』という言い方ができるとしています。

太陽系は太陽を中心として、九つの<sup>わくせい</sup>惑星とほかの<sup>びしょうてんたい</sup>微小天体から構成されています。

地球は仲間の惑星とともに太陽系の<sup>いちいん</sup>一員です。

人間は地球上で生命維持の活動をしていますから、地球が『<sup>ち</sup>地』であり、宇宙空間は『<sup>てん</sup>天』になります。宇宙そして地球がないとすれば、私たち生命の存在はないはずです。客観的な事実として大宇宙があり、人間は地球という場で生活しています。それゆえ、人間は宇宙空間において地球を中心としてものを考えているわけです。

天気も地気も地球を中心において考えることになります。

参考：天体〔宇宙に存在する（ガス・塵・岩石）などの物質が集合した総称。〕

参考：<sup>こうせい</sup>恒星〔太陽のように自ら輝き、あまり変化も動きもない星。〕

参考：<sup>わくせい</sup>惑星〔太陽の周りを回りながら太陽の光を反射して光る地球の仲間。〕

参考：<sup>えいせい</sup>衛星〔惑星の周りを回りながら太陽の光を反射して光る月は地球の衛星〕

そうしますと、天気そして地球の地気と人氣の關係のうちに、天気下降と地気上昇があります。

てんきかこう      ちきじょうしょう  
「天気下降」      「地気上昇」

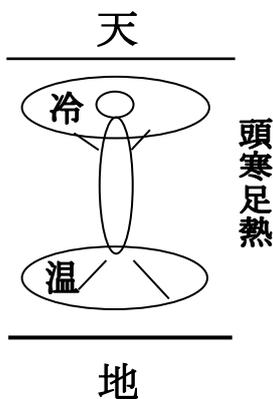
「万物の発生は天気下降と地気上昇のなかにある」

そのように中国ではいわれていたそうです。

このことは頭寒足熱とも関連しています。

🔍 参照⇒【初年】 5 回目【生剋比論】 07

宿命（4）頭寒足熱



この話を天と地というふうに分けます。

地面が温められると、水分が上昇します。

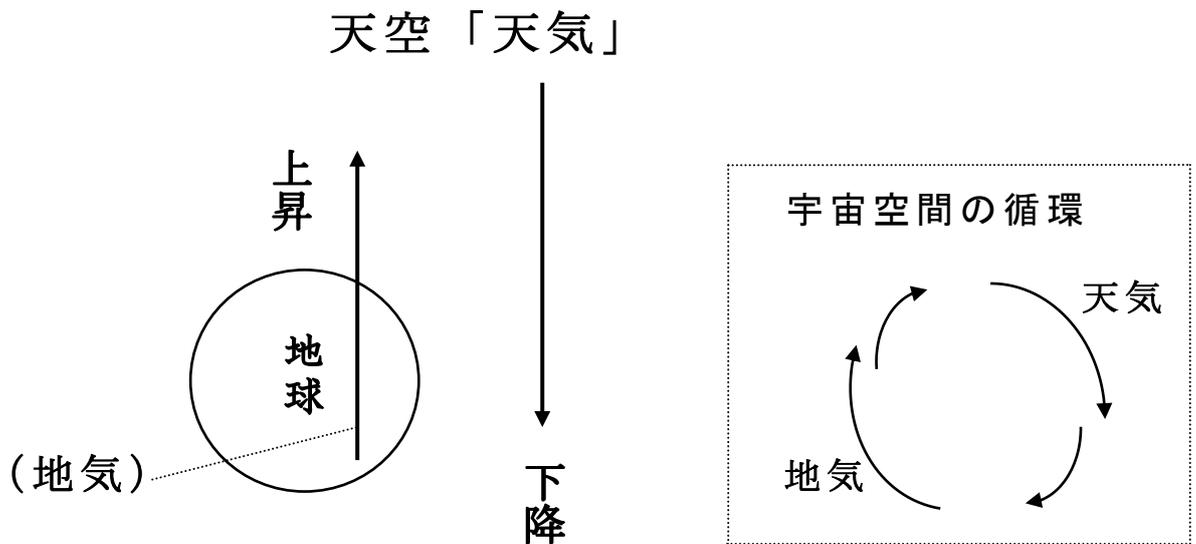
水分が上に昇って行くと、寒いので氷の粒になります。粒になると重いので落ちてきて、

また、温められると上昇し、上空で冷却されて落ちてきます。

人間が病気になるのは、自分のもっている「気」のバランスが崩れるのもひとつの要因です。自分に与えられた気が、自分の宿命道理に動いていれば、病気にならないと考えています。      参考：道理〔物事のそうあるべきこと。当然のすじみち。〕

天気（陽）と地気（陰）があり、地気は上昇し、天気は下降するということは、地球上で繰り返されていることです。この状態が一人ひとりの人間のなかで、<sup>おこな</sup>行われているという考え方です。

宿命（5） ㊦ 図



㊦図のように…天気が下降して、地気が上昇する気の循環は、宇宙空間で絶えず<sup>た</sup>おこなわれています。

天気は陽の気が集積したものであると考えていまして、万物の発生・発育の根源です。

地気は陰の<sup>いん</sup>気が<sup>き</sup>集積したものであるとしています。

天気と地気が調和することで、生命を<sup>はっせい</sup>発生させ維持していると考えています。

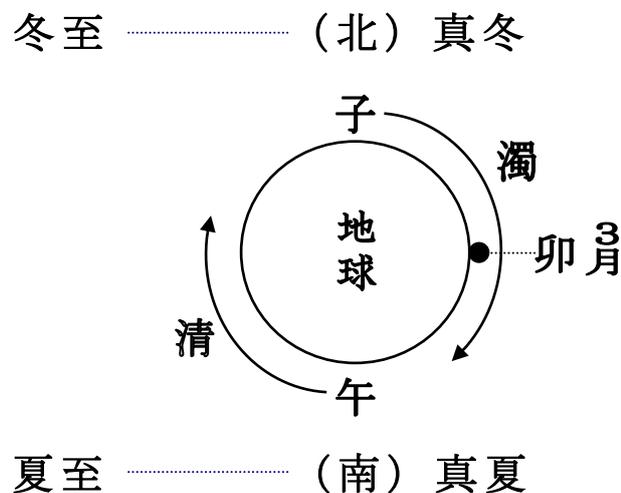
参考：発育〔発生成育すること〕

人間も小宇宙であるゆえに、人間自身も天気と地気を備えていますので、身体の中かで、天気と地気が循環していると考えています。

天気（陽気）は熱であり、極限に達すると、一転して陰気を生ずる。陰気に転じると寒を生ずる。

地気（陰気）は寒であり、極限に達すると、一転して陽気を生ずる。陽気に転じると熱を生ずる。

宿命（6）㊦㊧



㊦㊧で…地球上における、宇宙空間の『気』との関係を考えますと、寒（陰気）の頂点に達して、そこから一転して熱が生じてきます。

熱は（午）へ向かって、だんだんと最高になっていきます。

参考：一転〔がらりと変わること〕

夏至げしに至いたると、熱は頂点に達して、そこから一転して寒を生じていきます。

(3月であれば卯月うづきですから、ちょうど、子ねと卯うの中間のあたりに位置します)

1年の「気」のうごきのなかでは、冬至と夏至が(陰気)と(陽気)の境さかいになります。これが1年の話です。

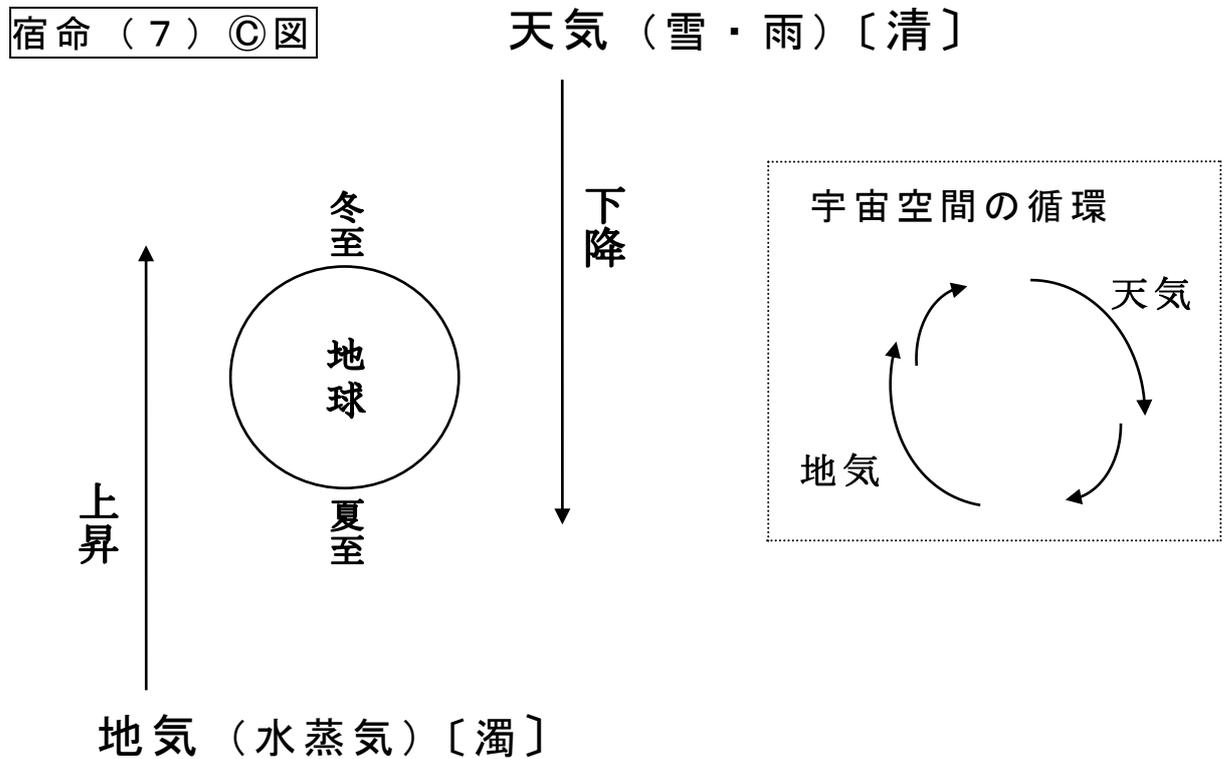
陰気は冬至とうじ(子ね)で頂点に達します。

陽気は夏至げし(午うま)で頂点に達します。

夏至を過ぎると、一転して、冬至へと向かって……寒を生じます。同時に〔濁だく〕を生じます。逆に、冬至から一転して陽に転じると、熱を生じて〔清せい〕を生じます。

⑧図の循環を天気と地気に合わせて考えます。 ➡

②図の循環の流れをもう一度、天気と地気に合わせて考えます……③図を見てください。



③図は地気が上昇して、天気が下降するという循環になります。

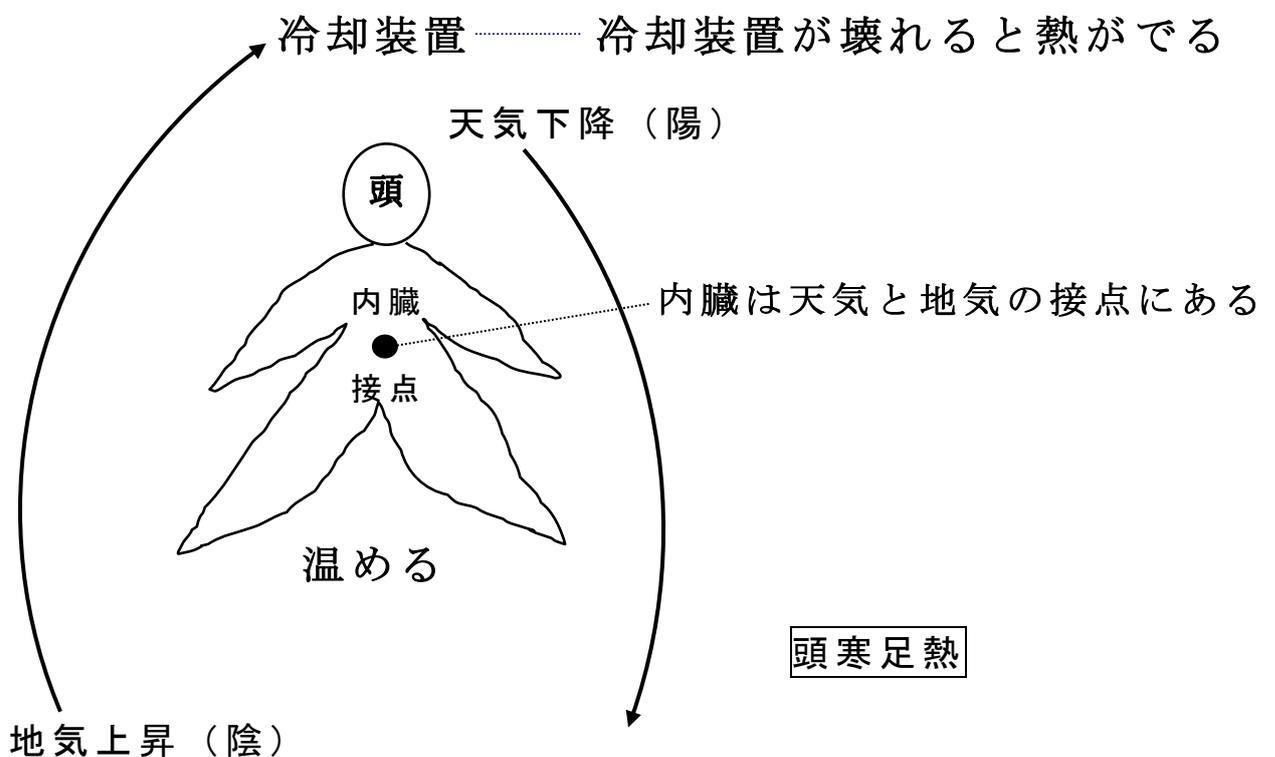
この原理が「天気下降 [清]」と「地気上昇 [濁]」です。この循環の仕組みが、人間の体内でも行なわれていると算命学は考えています。

②図は季節の変化で行われていて、考え方はおなじですが、その循環の仕組みは③図とは異なります。ようするに、地上で温められた「地気」が上昇して、

てん  
天で冷やされて「天気」<sup>てんき</sup>になって下がってくるという  
ことになります。

宇宙空間のこの仕組みが、人間の身体のなかで行わ  
れていて宿命と人体という話があります。④図です。

宿命（8）④図



足から地気が上昇して、頭に上がった気は下降する  
と考えています。

頭は冷やして、足は温めることになります。

冷え性の方は、循環のリズムが狂っていると考えら  
れます。

④図に…地気（陰）と 天気（陽）が書いてありますが、その陰陽の接点は内蔵です。地気上昇と天気下降がうまくいかないと内蔵に問題がでます。

頭から<sup>お</sup>下りてくる気が〔清<sup>せい</sup>〕をもたらし、足から<sup>のぼ</sup>昇る地気が〔濁<sup>だく</sup>〕をもたらし。と考えています。

頭は冷却装置としての役割ですが、循環がうまくいかないとクーラーが壊れるので熱が出ます。

熱が出ると<sup>こおりまくら</sup>氷枕で頭を冷やすという考え方です。風邪を引いて熱が出たら、頭を冷やして、足を温めることで、気の循環を調整しようとするわけです。

天気（陽）は<sup>はついく</sup>発育の<sup>こんげん</sup>根源に問題が起こります。

地気（陰）は<sup>しゅうしゆく</sup>収縮と考えています。

天気下降・地気上昇に問題がでると、<sup>けっこう</sup>血行の<sup>めぐ</sup>巡りに問題がでます。

血流の循環に問題が出るということは、異常に太るとか、異常に痩せるとかにもなるでしょう。

参考：発育〔育って大きくなること。〕

参考：収縮〔引きしまり縮まること。〕

頭が疲れてくると、自分の冷却機能が壊れます。

体温を正常に保つには、頭と足の血行循環です。

足が疲れてくると、加熱機能が弱くなります。

ここがこわ壊れると病気の原点になり、かぜ風邪をひくとか……

お腹を壊すとかのちょうこう兆候が現れ、そのまま放っておくと内蔵がいた傷みます。その疾病の先には退化的疾患しっぺい さき たいかてきしっかんもあり得ます。

⇒ 内蔵はごぞう五臓です。天気と地気の接点にあります。

<small>ごぎょう</small> 五行	⇒	木性	火性	土性	金性	水性	} 陰占の世界
<small>ごぞう</small> 五臓	⇒	肝臓	心臓	脾臓	肺臓	腎臓	

**宿命（9）基本型**

につかん 日干には何もないのですが、なに 頭脳をとうそつ 統率

する場所です。

参考：統率〔自分の意志通りに行動させる。〕

**基本型**

頭 脳	心 臓	腎 臓	日 干	月 干	年 干	<table border="1"> <tr><td>日干</td><td>月干</td><td>年干</td></tr> <tr><td>頭脳</td><td>心臓</td><td>腎臓</td></tr> <tr><td>○</td><td>火</td><td>水</td></tr> <tr><td>金</td><td>土</td><td>木</td></tr> <tr><td>肺臓</td><td>脾臓</td><td>肝臓</td></tr> <tr><td>日支</td><td>月支</td><td>年支</td></tr> </table>	日干	月干	年干	頭脳	心臓	腎臓	○	火	水	金	土	木	肺臓	脾臓	肝臓	日支	月支	年支
日干	月干	年干																						
頭脳	心臓	腎臓																						
○	火	水																						
金	土	木																						
肺臓	脾臓	肝臓																						
日支	月支	年支																						
○ 日 干	月 干	年 干	○ 命 令	心 臓	腎 臓																			
日	月	年	肺	脾	肝																			
支	支	支	臓	臓	臓																			
肺 臓	脾 臓	肝 臓	日 支	月 支	年 支																			

〔たとえば〕かんぞう 肝臓の悪い人は、ねんし 年支のぐあい 具合が不調になりますから酒を飲み過ぎると肝臓（年支）がやられます。具合〔からだの状態〕

五臓が正常でない人は、頭の指図が狂ってきます。  
 知的作用が狂ってくると、正常な判断ができなくなり、  
 詐欺などの被害にも遭いやすくなるでしょう。

参考：指図 [指示してさせること。]

宿命（10）Pさん をみますと、（年支）が木性ではなくて  
 水性がありますから、肝臓の場所に腎臓があることになり  
 ます。この姿は肝臓の働きを、腎臓が補うことになるため  
 に腎臓の負担が大きくなります。

水性がたくさんある人は、腎臓の負担がそれだけ重くなります。  
 1つで2役も3役もこなさなければならぬためです。

宿命（10）Pさん								
	火 心臓	水 腎臓	日 干	月 干	年 干			
頭 脳	月 干	年 干	命 令	心 蔵	腎 蔵			
日 干	月 干	年 干	肺 臓	脾 臓	腎 臓			
支 肺臓	支 脾臓	支 腎臓	日 支	月 支	年 支			
金	土	水 性			水 性			

			基本型		
日 干	月 干	年 干			
頭 脳	心 臓	腎 臓			
○	火	水			
金	土	木			
肺 臓	脾 臓	肝 臓			
日 支	月 支	年 支			

基本型の年支は肝臓の木性、それ腎臓の水性になっている。

＊ <sup>いつみまさたか</sup> 逸見政孝 1945 (S20) 2-16 (逸見太郎と逸見愛の父親)

内蔵すべてガン [1993-12-25 48歳没] 宿命 (1 1) 逸見

③	戊	乙		玉堂星	天極星	8 丁丑
戌	寅	寅	酉	龍高星	龍高星	18 丙子
亥	戊	戊		天貴星	鳳閣星	28 乙亥
	丙	丙				38 甲戌
	甲	甲	辛			48 癸酉

**基本型**

日干	月干	年干
頭腦	心臓	腎臓
○	火	水
金	土	木
肺臓	脾臓	肝臓
日支	月支	年支

五行 (木 火 土 金 水)  
 肝臓 心臓 脾臓 肺臓 腎臓

③ 土 木  
 寅 寅 酉  
 木 木 金

<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">逸見政孝</span>		
頭腦	脾臓	肝臓
③	土	木
木	木	金
肝臓	肝臓	肺臓

五行 ⇒ (木 3) (火 0) (土 1) (金 1) (水 0)

☞ 個人の宿命をみたときに、つまり干支の配置は……

腎臓の場所に腎臓があるとは決まっています。

むしろそうでないのがふつうです。

五行のなかで、1つ「<sup>き</sup>気」が多いと、そこが欠点になりますし、なにも無くても、そこが弱点になる質をもちます。

参考：弱点〔不完全なところ。〕

<sup>いっみ</sup>逸見さんの場合は、肝臓が腎臓の場所にあり、肝臓の場所に肺臓がありますから、<sup>かんぞう</sup>肝臓が腎臓と肺臓の二役を引き受けることになります。肝臓の<sup>ふたん</sup>負担が大きくなります。また、水性（腎臓）が宿命にありません。

火性（心臓）もないです。 無いのは欠点です。

心臓を働かすのは<sup>ひぞう</sup>脾臓なので、脾臓の負担が大きくなります。

腎臓を働かすのも肝臓ですから、肝臓の負担が大きくなります。 脾臓・肝臓に気をつけないと身体を壊します。

宿命に無いのも欠点ですが、有りすぎても欠点になります。

<sup>はいぞう</sup>肺臓（金性）は、肝臓（木性）の場所にありますが、これは1つです。

最後まで残るのは肺臓です。肺臓にきたら死です。

☞ 「丙火」のある場所は、頭脳を統率する場所ですから、<sup>ふく</sup>臓器には含みません。

まつだゆうさく  
 ＊ 松田優作 1950 (S24) 9-21

宿命 ( 1 2 ) 松田

1950-9-21 戸籍上の生年月日 [1989-11-6 39 歳没]

子	⑥ 乙	庚		調舒星	天極星	6 丙戌
	未	酉	寅	貫索星	鳳閣星	16 丁亥
丑	丁		戊	天南星	車騎星	26 戊子
	乙		丙			36 庚寅
	己	辛	甲			46 辛卯

基本型

日干	月干	年干
頭腦	心臓	腎臓
○	火	水
金	土	木
肺臓	脾臓	肝臓
日支	月支	年支

五行 ( 木 火 土 金 水 )  
 肝臓 心臓 脾臓 肺臓 腎臓

⑥ 木 庚  
 乙 酉 寅  
 未 土 酉 金 寅 木

松田優作		
頭腦	肝臓	肺臓
⑥ 土	木	金
土	金	木
脾臓	肺臓	肝臓

五行 ⇒ ( 木 2 ) ( 火 0 ) ( 土 1 ) ( 金 2 ) ( 水 0 )

☞ 五臓の配置は **基本型** が基本になります。

肝臓の場所に肝臓があるので、肝臓はしっかりしています。肺臓が2つあるので、肺臓と肝臓の負担が大きくなります。自分の持っている臓器は本来1つしかないのですが、2つあるということは、役目を2箇所でしなくてはならないわけです。

参考：基本〔物事の判断のよりどころとなるもと。〕

間違えないでください。物理的に肺臓が腎臓の役目ができるわけではありません。

肺臓が腎臓の代わりをかするとか、肝臓が心臓の代わりをかするとかを論じているのではありません。

自分に無い臓器をほかの臓器が補助するため、補助を担う臓器の役割が過重かじゅうになることを論じています。

そうしますと、松田さんの宿命に無い臓器は、腎臓と心臓ですから、これらは欠点になります。

五行のバランスが崩れて調節できなくなるということです。

肝臓だけはしっかりしていたので最後まで残ります。しかし、肝臓が傷んだときには死ということです。

逸見政孝さんと松田優作さんの干支で、死の因<sup>いん</sup>を挙<sup>あ</sup>げましたが、実際にはほかの問題も抱えています。

人間は相当<sup>そうとう</sup>に討たれないと死なないのです。

参考：調節〔ほどよくととのえること。釣り合いの取れるようにすること〕

参考：相当〔物事の程度がふつうをこえているさま。〕

⇒ 宇宙空間に天気があり、地気があり、地気が上昇して天気が下降することは、地球上の万物を誕生させる原点であると考えています。

そのなかには人間も含まれます。

生命の躍動<sup>やくどう</sup>には天気上昇・地気下降が必要であり、人間を小宇宙として考えていますから、人間個人のなかでも、おなじことが行われています。

天気が下降して、地気が上昇する。

その接点に内蔵があると考えています。

天気下降、地気上昇が順調に行われないと、内蔵が損傷する・壊れることになります。

壊れるという姿のなかで、1番軽いといいますが、その徴候が出るという状態は〔風邪<sup>かぜ</sup>をひいた〕〔お腹をこわした〕とかです。

その症状がおさまったから、治癒ちゆしたことにはなりません。一時的におさまったということであって、完治してはいないかもしれないわけです。完治していなければ、病気は体内で進行していくことになります。

風邪かぜは万病の元といわれますように、どんな大病も最初は風邪のような初期的な兆候ちょうこうからきます。風邪がおさまると、病気が治ったと勘違いする人がいますが、それを何回も繰り返しているあいだに、内蔵がやられていたとか、ガンになっていたとかの退化的疾患たいかてきしっかんの問題が起りえます。

人によっては手遅れということもあるわけです。

医師の診察で『ガン』です。

『あと3カ月の命です』といわれるような場合は、最初の初期段階で、何かしらの疾病しっぺいがすでに発生していて、それが治癒していないために、引きずっていたのでしょう。

風邪りかんに罹患して、熱をだすのは、体内の気の循環がうまくいっていないのです。

風邪をひく現象として、『足が冷える』『頭がのぼせる』とか『足が浮腫<sup>むく</sup>む』とかさまざまですが、それは地気上昇がうまく働かないということです。

『頭がボーッとする』というのも、天気下降が円滑<sup>えんかつ</sup>にはたらいしていないからです。

人間の内蔵は五つしかありません。ひとつが損傷したら、その人は健康で生きてはいけません。

「病占<sup>びょうせん</sup>」は内蔵を五行に置き換えますが、それとは別に干支を五臓に配置して考えていきます。宿命をみたときに、おなじ「干」、おなじ（支）があるのはふつうです。

宿命に五行がそろっていても、五行が本来の所定の位置に座<sup>ざ</sup>していないとか、もともと宿命に無いということもあるわけです。

無いということは、ほかの臓器がその代わり<sup>か</sup>をすることを考えています。

人体には内蔵が五つあるのに、宿命をだすと、宿命に内蔵が五つ出ていないのがふつうといえます。

逸見政孝いつみまさたかさんの日干にっかんは「丙火へい か」ですから、頭脳を統率する質は火性です。宿命（11）逸見 16 ページ

松田優作まつだゆうさくさんの日干にっかんは「己土き ど」ですから、頭脳を統率する質は土性どせいです。宿命（12）松田 18 ページ

風邪を治すには、身体の中かの地気上昇と天気下降が円滑にはたらくようにすれば風邪は治ります。

しかし、それらが順調に循環していないのに、一旦いったんは熱がおさまり、咳がおさまると、治ったと思うわけですが、実は治っていないのです。

さまざまな療法があるわけですが、気の循環ということで風邪を治す療法として『自分の足を温めて、頭を冷やして』循環させないと、風邪は治らないと考えています。

☞ 身体は生命活動を維持するための臓器を備えています。宿命に特定の臓器の「気」が無いという場合は、その臓器が無いための欠陥けっかんをもっていて、ほかの臓器に負担がかかるという欠点があるわけです。〔たとえば〕逸見さんの宿命には、心臓の「気」がないので、心臓に欠点・弱点けってんが出て不思議ではない。という考え方です。

心臓に欠点が出るとき、心臓の代わりに<sup>ひぞう</sup>を担うのは脾臓です。

脾臓が過重な負担に耐えられなければ、脾臓にも<sup>そんしょう</sup>損傷が出て、心臓にもその影響がおよぶというように連動していると考えています。

干支のうえで病気の原因を突き止めていくと、そのような姿になっているわけです。

それゆえ、逸見さんが<sup>ひぞう</sup>脾臓をおろそか<sup>あつか</sup>扱っていると、心臓に負担がかかってくるということになります。

しかし、心臓の代役を<sup>は</sup>果たしている脾臓のほうが、先に討たれることにもなるという考え方です。

「無いのも欠点」「有り過ぎるのも欠点」です。

逸見政孝さんも、松田優作さんもそうですが、宿命のバランスが取れていないところを観ることで弱点がわかります。

算命学の考え方は、自分の宿命を<sup>あや</sup>危うくする可能性がある不十分な箇所を知って、その弱点を注意していけば、病気にはならないと考えています。

☞ <sup>ぞうき</sup>臓器に関する問題だけに限ったことではなくて、地気上昇・天気下降が基本的にあるわけです。むしろそのほうが大事であるといえるでしょう。それらが順調に働いていないと、いずれ臓器がやられてしまうということになります。内蔵は『陰陽の接点に存在している』という考え方があります。

〔100歳〕まで生きられる方は、自分の生き方のなかに病気に<sup>そな</sup>備える<sup>ししん</sup>指針もあるでしょうし、<sup>じぶんどくじ</sup>自分独自の健康法をもっているはずです。

その人にとっては……自分が<sup>じっし</sup>実施している健康法が合っていて、良い結果につながっていても、それとおなじ方法が第三者の他人にも、効果があるとはいえません。

つまり、人間のからだは、誰もがおなじではないはずで

〔たとえば〕100歳の長寿の人が『私はこのようにして、自分の<sup>けんこうほう</sup>健康法を<sup>じっこう</sup>実行してきました』といってもその方法がどなたにも<sup>あ</sup>当て<sup>は</sup>嵌まるとはいえません。

げんき<sup>い</sup>で生き活きと——健康で長生きしたい方は——  
自分なりの健康法をご自身で編み出すことが必要と  
いえます。

参考：編み出す〔自分で工夫して新しい物事や方法を考え出す。〕

びょうせん<sup>いんせん</sup>は「陰占」の授業で学びます。

【初年】 6 2 回目【宿命と健康】 終わります

つぎの授業 ⇒ 【初年】 6 3 回目【天中殺の心得（1）】です。